

令和6年度 第1回 第5期鶴見・あいねっと策定検討プロジェクト 議事要旨

日時：令和6年10月25日（金）14：00～16：00

場所：鶴見区福祉保健活動拠点多目的室B・C

委員：石井委員、板山委員、祝出委員、大野委員、押山委員、小林(広)委員、
小林(政)委員、齊藤委員、清水委員、勝呂委員、八森委員、日向委員、
浜田委員、平森委員、増子委員、松坂委員、宮野委員

事務局：【区役所】福祉保健センター長、福祉保健センター担当部長、福祉保健課長、
福祉保健課事業企画担当係長、事業企画担当職員

【区社会福祉協議会】事務局長、事務局次長、担当職員

1 開会（進行：福祉保健課長）

配付資料の確認。

2 福祉保健センター担当部長あいさつ

みなさまこんにちは。鶴見区福祉保健センター担当部長の黒川です。みなさまにおかれましては日頃から第4期あいねっとの推進にご尽力いただきありがとうございます。

また、本日は第5期計画の策定に向けたプロジェクトにご参加いただき、併せて御礼申し上げます。

第4期計画は今年で4年目を迎えており、地域での積極的な推進をお願いしているところでございます。また、第5期計画は令和8年度からの計画になりますが、今年度から策定を開始しており、本日のプロジェクトにお集まりいただいております。7月の推進委員会でもお話をしましたが、第5期計画の策定に向けて、まずは、プロジェクトの場で議論いただくこととしています。本日は第4期計画の振り返りも行いますので、皆様が様々な活動をする中での経験や課題などから第5期計画に向けてのご意見をいただき、議論ができればと考えていますので、本日はよろしく申し上げます。

3 議事（進行：福祉保健課長）

議事の確認及び写真撮影の承認。

(1) 第5期鶴見・あいねっと策定検討プロジェクトについて（説明：福祉保健課事業企画担当係長）

第5期の区計画策定に向けて、全体の方向性を確認する推進委員会の下に、具体的な内容の検討を行うための策定検討プロジェクトを設けている。メンバーは推進委員の方に加えて、現在、様々な分野において、鶴見区内でご活躍している3名の方にも参加いただいている。区計画は今年度から検討を開始しているが、このプロジェクトにおいて様々な視点から検討をいただくことで、内容を固めていきたいと考えている。令和8年3月の完成に向けて、今年度は第4期計画で示すところの「基本理念」、「推進の柱」、「推進の土台」、「行動目標」にあたる骨子の部分である、次期計画の方向性を決めていく重要な年度。それを本日と12月の策定検討プロジェクトで検討をし、1月の推進委員会で確認いただくことを予定している。

改めて本日の議題としては、まず、区役所・区社協・地域ケアプラザが第4期の期間中にどのような取り組みを行い、次期計画に向けてどのような課題があるのかの概略を説明する。

次に令和5年以降の推進委員会で出た意見を柱ごとにまとめたので共有をさせていただきます。

その後、プロジェクトから参加する3名のメンバーの話聞き、第5期計画に向けてのキーワードを書き出してもらった上で、グループワークを実施する。

(2) 第4期鶴見・あいねっとに対する区役所振り返りについて

(説明：事業企画担当職員)

《柱1》

コロナ禍で活動が縮小・中断した団体については、担い手の高齢化や新たな担い手が不足しているという現状がある。このような状況でも地域活動をやってみたいと意欲を持つ方もいるが、既存の地域活動に踏み込むことに躊躇してしまう方もいるため、潜在的な担い手へのアプローチをすることが必要。また、早い時期から地域活動に興味を持ってもらうために出前講座などを行い、若年層を地域と結びつける取り組みも大切。これらを踏まえて、若い世代や企業との連携を踏まえた地域活動をコーディネートできる人材の育成や、既存の枠にとらわれずに多様な形で活動に参加できる機会の創出や分野を超えた取組の共有、教育機関と連携した福祉教育の展開が今後の課題となっている。

《柱2》

生活困窮や障害のある方、認知症の方などの支援が届きにくい方がいるということの普及啓発を行うと共に、子どもの居場所や多世代サロンなどの居場所から相談に繋がることもあるため、地域資源の最新情報を把握して、正確な情報提供を行うことが求められる。今後の方向性としては複合的かつ複雑な課題に対して、包括的に対応できる職員の育成が求められている。また、支援が必要な方に情報を届けるだけでなく、当事者の声をしっかり聞いて支援に反映させることが必要な状況となっている。

《柱3》

コロナ禍後の地域活動の再開にあたり、活動における感染症対策への不安の声を聞く時期もあったため、感染予防の知識の啓発を行い、時には専門職が地域に出向き再開に向けた検討を一緒に行うこともあった。また、外出自粛が長引くことによるフレイルの低下については、予防講座の実施や市営バスの電子掲示板を使った予防啓発にも取り組んだ。区健康課題の解決に向けては健康診断の結果から対象となる方を絞り、届くような情報発信に現在取り組んでいる。第5期計画に向けては、健康情報の発信においては紙媒体のみでなく、対象者に併せて、デジタル媒体も使用しながらの効果的な情報発信が求められている。

(3) 第4期鶴見・あいねっとに対する区社協振り返りについて

(説明：区社協担当職員)

《柱1》

区社協会員の連携強化に向けて、ヤングケアラー講座や広報紙の研修を実施した。また、子どもの居場所連絡会を開催し、会員の種別を問わずに横断的につながることができる機会を設けた。また、コロナ禍や鶴見区障害者団体連合会解散により終了した、障害者の新成人の集いも寄付金や外部委託、地元企業からの支援などもうけて、今年3月に新たな形で復活させることができた。移動に課題がある地域については、民間タクシー会社と協力し移動支援の取組を実施した。このように、今後はこれまでの担い手の枠組みにとらわれずに、企業等とも連携をしながら、地域づくりを支援する必要があると考えている。

《柱2》

各地区に出向いて、障害者の理解を深める取り組みや当事者と触れ合う機会を設けた。また、フードドライブを通じて、寄付者と支援が必要な人を結びつける取組を積極的に行っている。地域で心配な子どもがいる場合には地域と連携しながら、食支援を行うこともできた。今後も子どもの頃から地域との交流の場ができるように、助成金も活用しながら団体との連携も図っていききたい。

《柱3》

地区社協における体操教室などの数が少しずつ増えてきており、外国をルーツとする方も参加できる活動ができるなど、多様性も進んできている。地域の活動においては支援する人・される人の区別なく役割を持つことで、やりがいを感じることもあると思うので、多様な形で参加できる居場所が増えるように今後も支援を続けていく。

(4) 第4期鶴見・あいねっとに対するケアプラザ振り返りについて (説明：板山委員)

《柱1》

地域への愛着が深まるように子育てや高齢者など、各段階を意識した連絡会や事業の展開をしている。また、企業や他施設とも連携を取りながら、それぞれの強みを活かした講座などを実施している。新たな担い手の発掘や多世代間での交流は一部に限られている現状もあるため、今後の課題と捉えている。

《柱2》

広報誌などを通じて地域への情報発信を行うほか、地域のイベントや集まりには積極的に足を運んでいる。その結果もあり、顔の見える関係作りが少しずつ進んでおり、地域ケアプラザという名称は広がっていると実感することもある。その反面、ケアプラザでは何ができるのか、何をしてもらえるのかといった理解が進んでいない部分もある。地域の方と一緒に地域づくりを進めるために、地域ケアプラザへの理解を深めてもらい、地域の方と信頼関係を築くことができるように今後も努力したい。

《柱3》

多様化の時代に併せて、地域の様々な方に向けて講座を行っている。しかし、まだ特定の世代や人材にのみ情報が届いている面もある。包括分野であれば高齢者、交流分野であれば子育て世代や障害のある人向けの取組が多いが、地域にはそれ以外の方も沢山いるため、普段ケアプラザとの関わりが少ない方にもアプローチできるように、事業手法などは引き続き検討を重ねたい。

(5) 推進の柱ごとの区全体計画の振り返り（説明：事務局次長）

《柱1》

- ・子どもの意見を取り入れることは大切。
- ・高齢化や担い手不足で現在の地域活動を継続することは難しいが、一方で地域貢献したい企業もあるため、福祉の分野を超えた繋がりがあるといい。
- ・繋がっていくためにつなぎ役となる人、これまでと違ったつなぎ方ができるとやコーディネーター力が重要になってくる。
- ・キーワードは「子ども」、「分野を超えた繋がり」、「高齢化・担い手不足」→「多様な人や団体が参加し、つながっている地域」となっているが、これは現在の柱1にもあり、引き続き大切な要素となっている。

《柱2》

- ・困っている人でも相談できない人は多いがいわゆる相談窓口ではなく、気心のしれた仲に、ポロっと相談しているケースもある。
- ・困っている人に届くような情報発信が大切。
- ・気にかけてもらえる。見守られていると思うことが大切。
- ・外国へのルーツがある方や障害のある方など多様な背景を持つ方がいるが、その方たちの背景を理解して、その人たちの立場で考えることが大事。
- ・相談内容は非常に多岐に渡るため、支援者同士が相互に連携することが必要
- ・キーワードは「困っている人に気づく・情報が届く」、「おたがいさまの関係」「一人一人の多様な背景」、「縦割りではない相談支援」→「困ったときお互いに気づき、助けあえ、支援が届く地域」とまとめた。第4期計画に出なかった表現だが、「気づくことが大事」という意見が何度か出ていた。

《柱3》

- ・運動会などのイベントに誰でも安全に参加できるといい。
- ・健康づくりは高齢者のイメージがあるが、若いうちから活動に参加できるといい。また、様々な主体がコラボレーションして、取り組むことができている。
- ・ボランティア活動などの役割があるということは心や体の健康に結びついている。
- ・キーワードは「誰でも参加できる」、「楽しい内容・コラボ」、「認知症の理解」「用事や役割がある＝健やかでいられる」→「誰もが自分らしく健やかでいられる地域」。
- ・第4期計画と比較すると年齢や障害の有無に関わらず誰もが参加できることや足腰の弱さといった健康のみでなく、「自分の役割がある」や「健やかには色々な意味がある」という話も多かった。

(6) プロジェクト委員からの情報共有（浜田委員・勝呂委員・大野委員）

[浜田委員]

あいねっとでは各地区での課題を取り上げながら、地域の課題を吸い上げてみんなでそれに対して取り組んでいる形を、取材を通して見させてもらっていた。

印象に残っているエピソードとして、とある地域の班長が、街灯がついていなくて暗い道があるということを会長に伝えたら、街灯がついたということがあった。班長はその成功体験から地域の活動に積極的に取り組むようになった。そういった生活に密着した活動だったということがなかなか伝わっていない部分もあると思う。

先日まちづくりゼミナールに出席した際に、講座を行っていた大学教授の話聞いて感じたことだが、昔と違って制度やルールが成熟している部分が多いため、昔のような地域づくりは難しいのかもしれない。みなさんはこれまでのルールがない状態の中で先頭に立って活動をするが多かったと思う。

しかし、これから新しく参加する人は、地域の枠組みがしっかりできているため、参加する意義が見いだせずモチベーションが薄くなっていることがあると感じた。福祉的な街づくりには担い手不足や参加者不足が課題としてあげられているが、それには現役世代とのつながりが欠かせないと思う。時代が変わっても成熟している地域に外から一歩踏み込む時には勇気があるため、いい活動をしていてもそれが伝わっていないと、イメージだけで「煩わしそう」や「大変そう」といったネガティブな感情を持たれてしまう。そうならないために、いい活動ということを周知していくことは大切だと思う。また、地域の担い手不足を住民のみで解決するだけでなく、商店街や企業、学校などのジャンルを超えた繋がりの中で解決することが必要だと思う。

例として、これまでお祭りでお神輿や屋台を地域でやっていたが、担い手の高齢化で従前の取組が難しい状況があったり、その際の方策として商店街にお願いをしてキッチンカーを呼ぶなどをしてお店を出してもらった事例があった。

餅は餅屋ではないが、今後担い手が足りなくなってくる状況ではそれぞれができることをやるということが必要になってくると思う。子育て世代と繋がるということであれば、お祭りの中の1ブースを親子向けにして学校に参加者を募ってもらうなど、少しずつ変えていったり取り入れたりすることは効果的だと思う。私が考える今後の地域のキーワードは「ジャンルを超えているんな人や団体を巻き込んでいくこと」だと思う。

[勝呂委員]

困っている人や子どもたちが実際にどのようなことに困っているのかが分からないことや、地域で支えあうといっても実際に体現をするには難しいということもあると思うが、今日は具体的な取り組みの例も挙げながらお話ができればと思う。

傍から見て生活環境に様々な問題があると感じる家庭でも、生活をしている子どもにとってはそれが当たり前のため、何に困っているかが分からずに、状況を言語化して外部に相談するということが難しい状況もある。困っていることをその家庭から相談できないとサポートは届かない。また、子どもの成長スピードはもの凄く早く、それを配慮した親への支援はなかなかできていない。親と子どもの制度が異なるため、縦割りになる窓口の中で同じ話を何度もしなければいけないこともある。一般社団法人 Omoshiroでは親子を一体として伴走する取組をしており、ケアマネの事業所なので、へ

ルパーさんや訪問看護さんを調整して、親子にサポートを届けている。

例えば、夏休みの児童がいるご家庭には親子が一番困っていることを考えて、夏休みは給食が無いことから、ヘルパーさんの内容を調理・買い物・メニューの検討に変更するなど、ご家族の状況に合わせた支援ができるようにしている。取り入れる支援には制度上の壁もあるが、進路の選択などの子どもたちの人生の岐路の際に親子がお互いの想いを伝えあえる関係を作れるようになってほしいという想いから、伝える・伝わることの練習をしたりしている。

その活動を通じて私たち大人が今地域でできることは自分のものさしと相手のものさしを大事にするということだと言える。コロナを子どもの頃に経験した今の子どもと私たちでは価値観が違うということを認識して、言動の背景をしっかりと感じて、支えあうや見守ることを仕掛けていくことが大切。子どもに対して挨拶だけでなく、「来たの2回目だね!」といったように、見ているというメッセージを添えると子どもたちの心理的安全性が働くので、ここが自分の居場所だと認識することができる。せっかく作る地福計画なのでどのように伝えていくか、届けていくかということはみんなで考えていかなければならない。

[大野委員]

私からは具体的なこれまでの取組経過をご紹介させていただきたい。いかに地域の皆様とのつながりに支えられているかをお伝えできたらと思っている。まずは子育てタクシーについて、15年ほど前から実施しているためご存じの方もいるかもしれないが、子育て世代に特化した取り組みである。もともとは潮田のNPO法人バースデーランドさんと連携しており、今はわっくんひろばさんで運転手の子どもの保育を実施しつつ、チャイルドシートをつけての送迎や出産時の送迎を行っている。

UDタクシーとは、ご高齢の方や障害のある方が車椅子ごとご乗車できるサービスで、十数年前からよりそい看護ケアセンターと連携して実施している。

こういった子育てタクシー、UDタクシーの取り組みを鶴見の方に知っていただくべく鶴見区3大祭りに過去全て参加している。三ツ池に関しては10年以上参加しており、その他、マルシェや総持寺の祭り、見守りサークル等で車椅子の体験乗車等を実施している。これは本来のタクシーの仕事だが、それに付随して、これからを担う方にタクシーの可能性を知っていただきたく、職業講話力をかなり入れている。鶴見小学校、寺尾中学校に医療的ケア児の輸送について紹介をしたり、寛政中学校、末吉中学校についてもUDタクシーの紹介をしたりしている。東中学校ではSDGs関係、横浜商科大学では鶴見コンシェルジュになろう（鶴見に詳しくなろう）といった講話を実施している。

新型コロナウイルス感染症の影響で全く仕事がなくなった際、同じく厳しい状況となった飲食店と助け合いということで、タクシーで食べ物も運べるような法改正がなされ、さまざまなお店のテイクアウト食品を運ばせていただいた。

また、昨今ではタクシーの運賃が高くなっているが、使いやすくなる方法としてあいのりについてご説明したい。サッカークラブKAZUさんのあいのり送迎をしているが、最近では寺尾第二地区のお楽しみ福祉大会の際、上の宮、馬場エリアで、移動手段がないためイベントに参加できない方をあいのりという形で支援させていただいた。

先程餅は餅屋でという話があったが、最近ではタクシーだけではなく、我々の1番の

コアスキルである運転を活かした活動をしている。現在病院や介護施設等あらゆる場所で運転手が不足しているため、そういった施設に運転手を派遣している。具体的には、医療機関や幼稚園のバス等に派遣しており、安全に運転するというスキルを活かし、ドライバーが不足している地域の施設のお役に立とうという思いから活動を行っている。

本来不特定多数のお客様を送迎することがタクシーの仕事だが、移動困難者の活動を重視している。その理由は3つあり、1つ目は、もともとタクシーは移動手段がなく困っている人のための公共交通機関であったためである。もう1つはタクシー以外の福祉介護を専門にしたタクシーの福祉有償運送や外出ボランティアの担い手不足への取組の重要性を感じているためである。3つ目は、東宝タクシーは従業員の9割が鶴見の人であり、物理的にも心理的にも鶴見に愛着があるため、地域の変化に気づきを生みやすいためである。

(7) 意見交換（グループワーク）

今までの話を聞いて心に残ったことや、第5期計画で大事にしていきたいことを随時付せんに記載いただき、各グループで共有いただいた。

(8) グループワーク振り返り

意見交換の内容を事務局から全体共有した上で、振り返りを行い、まとめた。

[Aグループ]

柱1については、子どもたちをつながりの中で巻き込んでいきたいといった意見が出た。町内会やイベントで中学生を巻き込みたいといった話については、市場中学校では鶴見ふるさと科という授業をしているということで、将来鶴見に戻ってきてほしい思いから、地元を大切にするという授業を通して、地域のつながりの大切さを伝えていきたいという話が合った。

情報発信については、デジタル化は今後も重要だという意見が多く出た。また、個人情報取り扱いの難しさが課題感として出ている。

つながりという面では、自ら声をかける、発信していくことが大切という話が出た。

柱2については、困ったときに互いに気づき支え合うといった部分で、もやもやした相談を受けた際に「それってあなたの困りごとじゃない？」と言うことの難しさについて、心に残ったキーワードとして示された。話していくことで自分の気持ちに気が付くこともあるため、引き続き他機関等につなげるアンテナを張っていきたいという話があった。外国にルーツのある方々とは言葉で伝える・伝える事にハードルがあることもあり、通訳ボランティアが現在不足しているので、ボランティアの育成が今後必要なのではないかという意見があった。また、どんな困ったことについても声を挙げていいという環境づくりが大切だという意見もあった。

共通することとして、人材育成について心に残ったこととして書いていた方が多く、ハイブリッド型でお祭りを行うことや、外部の方からの新しい風を取り入れていくことについての話があった。

柱3については、若いころから健康づくりに関わる、健康に気づくというところでは早くから関わる取組を引き続き実施すると良いといった意見や、フレイル予防というところでは、外出ボランティアが外に出るきっかけになるため。そういったボランティア

が今後増えていくと良いといった意見があった。

その他、共通することとしては、家族単位の支援を考えていく必要があるという意見があった。高齢化に関して、80代、90代の方が地域活動をする現状について、未知の世界に足を踏み入れるにあたり、高齢化に係る課題をどのように乗り越えるのか考える視点が必要である。

移動手段については、あいのりが良い取組だといった意見が多かった。

防災訓練の取組については、必要な防災訓練の取組とは何かについて、ハンディキャップを持つ方と防災訓練を企画する方でコミュニケーションを取りながら、地域の防災について考えることができれば、より良い取組になるのではないかと。

[Bグループ]

介護者の会の方がいらっしゃったが、介護している最中は色々な助けがあることが分からなかったりするが、終わった後に色々な方に支えられたな、出会いがあったなという思いがあり、担い手側となって感謝や出会いを人に返している方がいる。

ある親子の話では、本人ははっきりと困っていると言わず、表現しないが、だからといって「困っているでしょ」と無理に入らず、絶対に見捨てず関わることで1年後に困っていることを打ち明けてくれたという話があった。そういった経験をした母親が、担い手になるというケースが多くある。

冒頭で外灯が付いたことでやる気が出た会長の話のように、地域の方の声に答え、実現することで喜ばれたことが、その後のモチベーションになっている。

柱3に重なるが、どんな立場でも役割があり、感謝されることが次の支援につながっているので、支援され、感謝され、支援をするといった輪に入ることが重要である。

つなぐ人、つなぎたいと思っている人がどんどん乗り込んでいくことができるのかについて時間の関係で深めることができなかつたため、次回深めたい。

鶴見区はポテンシャルのある地域のため、ジャンルを超えてつながることについて取り組みたい。

寺尾第二地区の話だが、子どもの地域に対する声を聞き、専門機関に協力していただきながらでも本気で答え、できないことはできないなりに何か考え返すといったことを行うことで、子どもが地域のために何かをしたいと思ってくれるようになり、担い手となったというエピソードもあった。

[Cグループ]

最も話題にあがったのは担い手不足についてである。成人の集いの話があったが、斉藤委員から、成人の集いで浜田委員が色々なところと繋げてくれたことで、自分たちの負担が軽減されて良かったといった話があり、そのことが障害のある方々が参加できる場面につながるということであった。

色々な方がつながり、巻き込んでいくことについて、アウトソーシングの中にプロフェッショナルの方が入ることで、気づきが生まれ、キャッチできることも増えるため、色々な方を巻き込むことが重要だといった意見もあった。まちをきれいにキャンペーン（ごみリンピック、臨海フェスでのごみ分別ブースなど）、防災訓練など中高生が地域の行事に気軽に参加できるよう声掛けをする。ボランティアに参加することで単位がも

らえる学校もあるが、そういった形で連携できるとよいという意見があった。自分たちの町が自分の手できれいになり、それに感謝の言葉をかけられる等成功体験を若い世代に得てもらい、モチベーションを上げることで多様な人の交流の機会が生まれ、近所で挨拶、声掛けによるつながりがひろがっていく。

制度・ルールが成熟し、昔のようなまちづくりができない。しかし地域の福祉以外の団体・企業と繋がることで、障害のある人や高齢者など、それぞれのニーズにこたえることができ（二十歳の集いでアウトソーシング、タクシーのあいのりの実現など）、サービスの選択肢が増えて生活の質が上がる。障害のある人のニーズにこたえるのは福祉だけではないため、活動を応援する団体、企業とつながることで分野を超え互いにWin-Winになる。

柱2については、「見守る」を仕掛けることが必要だという意見があった。気にかけているよ、みているよというメッセージを送ることは、注目・関心があるよと伝え、見守っているというメッセージになる。

想いをつなぐことが大事である。子ども、高齢者、障害者、分野を超えて想いをつなぐ、一緒に考えることが大事であり、まるっと丸ごと支援する必要がある。

色んな人を巻き込むことで、その中の誰かがキャッチして、気づきが生まれることがある。自分のものさしと相手のものさしのどちらも大事であり、それを伝えられるコミュニケーションを考える必要がある。伝えるだけでなく、伝わることが大事であり、情報と支援が届くようにしていかなければならないため、互いに気にかけて想いを伝える、共有する場があることが重要になる。

[勝呂委員]（次回プロジェクトにご参加いただくことが難しいため、全体的な振り返りやお気づきの点についてお話いただいた。）

皆さまお疲れ様でした。40分という短い時間でたくさんの意見が出て良かったと感じている。「計画」というとやらなければならないことになりがちだが、本来は市民の方が共感するキーワードや鶴見のあいことば等が入るものであってほしい。私のグループでは内容が近い意見でも表現が違うので同じ言葉は一つもなかった。

どんな言葉で伝えれば鶴見区地域福祉保健計画が皆様の心に残るものになるのか、鶴見で暮らしていてよかったと感じてもらえるものになるのかについて考えることが重要になるのではないか。

[八森委員]（全体の流れを踏まえ、お話いただいた。）

皆さまの話聞いて第5期の計画が楽しみなものになりそうな気がした。

共通の項目や分類不能な項目が非常に重要だったと思うが、やはり原則としての高齢化や担い手不足を押さえながら、本日は突破口についての議論が多くなされたと思う。3名のお話で皆さま勇気づけられた部分もあったと思う。自分たちだけでやる枠組みを超えて、アウトソーシング等、その中でもプロにお任せする部分と一緒に進める部分とハイブリッドで進めるのかといったところでは、福祉保健活動をしていると抜けるのが大変難しいと思うが、3名から勇気をいただいたのではないかと思う。

地域の中で大切なのは、一つの具体的ニーズに答えた（解決した）ということが、支援者の勇気にもなるし、ニーズを出した方、対象者の勇気にもなり、それが

一つの突破口なる。今後の大きなヒントになるのではないかと考えている。そういう意味でニーズの吸い上げということで、子どもだけではなく、様々な方の下から吸い上げるためにどうするかということこれから詰めていく必要があるのではないか。

巻き込むという言葉も出ていたが、成功体験から出た感謝の言葉が大きな意味になり、感謝の言葉が次の活動を生み、その人が地域を巻き込んでいくということが今も行われている。感謝の言葉を大事にしながら、あるいは感謝の言葉をしっかり伝えることにより、地域福祉が発展するといった話があった。このことをしっかり伝えていくことで、次の支援者を作る夢につながるのではないかと思う。

交流の場についてはたくさんあったが、計画の中ではもう少し具体的な内容を詰めていく必要がある。ジャンルを超えたつながりでは、本日はタクシーの話等、具体的な話があったが、いろいろなところにまだまだ芽があるのではないかといった話があった。

意識改革については、受け手の意識改革が必要だといった話があった。受け手の意識改革、支援を行う側の意識改革が必要で、ここでも子どもの意見を聞いて、しっかりこたえる、そしてそれが希望ややる気につながるといった話がなされた。

デジタル化は今後なくてはならないことということで第5期計画にどう盛り込むのかが重要ではないかといった話もあった。

困った人に支援が届くという柱では、基本としてはお互いさまの関係づくりが引き続き重要で、見守るというのが実際には関わる事が重要なのではないか。見守りには仕掛けが必要で、見守っていることを伝え、あなたのことを気にしているよというメッセージが必要だといった話があった。支援が必要な人に気づくということについて、対象者と語り合う時間が必要で、関わり、話をする中で、もやもやとしたような実際にある課題を一緒に考え、整理していく作業をしっかりとしていく必要があるといった話があり、本日のゲストスピーカーの話がヒントになり出てきたのではないかと思う。

自分らしく健やかに生きることについては、役割がたくさんあり、気づきを促す必要がある。支援が必要な方でもその役割に入るという気づきを促す必要があるといった話があった。その中で外出支援は欠かせない。プロやボランティアが関わる、あいのりといった支援もあるので、実際にハンディキャップを持った方が外出支援等の支援を受けられる状況を作るために考えていく必要がある。

家族内での支援についても今後考えていく必要があるだろう。独居の方は地域でということになるが、家族内で様々な問題を抱えている方は家族丸ごと支援が必要だといった話があった。

鶴見はポテンシャルがある地域のため、ジャンルを超えてつながることが大きな力になるだろう。ゲスト3名の他様々なジャンルの方がいらっしやと思うが、そういったジャンルのつながりを第5期計画でやっていきたい。

(9) 事務連絡（福祉保健課事業企画担当係長）

次回12月20日の第2回策定検討プロジェクトは区役所6階の会議室で時間は今回と同じく14時から16時である。今回お話しいただいた内容も踏まえ、事務局で第5期計画のいわゆる方向性の案をまとめさせていただき、次回の策定検討プロジェクトでお示しさせていただく。それについてみなさまで確認いただく時間を設定させていただきたいと考えている。

現在事務局でまとめている、区民アンケート調査や関係機関アンケート・ヒアリ

ングの結果、あとは統計分析結果なども、方向性の記載内容を裏付けるデータとしてお示しさせていただく。

引き続きあいねっとの策定にご協力をお願いできればと考えている。

5 閉会（福祉保健課長）

これで本日の策定検討プロジェクトは閉会いたします。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。